暮らしと県政・熊本

No.17　　1975

―目　次―

■ 心の通った福祉を実現するには ―座談会……8

■ちっちゃなおとなの健やかな成長を願って……26
―家庭教育相談事業から―

■「国土法」いよいよ施行……30
―当面は届出制度が適用―

■<この人と30分>
川上哲治……33

■熊本の経済……権藤正俊……36
―激動の時代を生きる―

■わが町わが村……<上益城郡清和村>……25

■グラビアページ

・<ふるさとの心>轟上水道……3
・美しい熊本づくり……17
・県民総スポーツ運動の推進を……18
・カラー熊本……20
・明日の産業を担う……22
・ボランティア活動……37
・阿蘇を中心に強い地震……38

随　想　欄……6
佐藤玲子・桑原莞爾・蒲池正紀

表紙は「おきん女人形」
おきん女の由来については色々ありますが文化・文政の頃の日奈久温泉に、おきんという美人の湯女がいました。美人薄命のたとえの通り、若くしてこの世を去ったため、何とかその容姿を伝えようとおきんの死を惜しむ声が強く、そこから生れたのがおきん女人形です。

▲水源の取水口（細川家の九曜の紋が目につく）

▲共同水場

轟上水道

市の中心部から西南へ二・五キロほど行ったところに轟水源がある。ここから城下まで細川支藩三万石の二代行孝の代で延々六キロの水道管を敷設、いまなお約二百戸の市民に給水されている。三百年以上も経って上水道として使われているものでは、おそらく日本最古のものであろう。

行孝が宇土に分封（一六四六年）されて、まず困ったのが飲料水。そこで当時の「肥後三名泉」といわれた轟山麓の湧水を引くことを計画、この大工事に着手した。この水を引くために藩内の不知火焼の窯元に陶管をつくらせ、これを連結して水道管を敷設、元録三年（一六九〇年）ごろまでに完成した。土木技術の発達していなかった当時としては、一大難工事であったと想像される。

しかし、この水道も百年近くも経つと老朽化が著しく、六代細川興文（月翁公）の代になって一大改修工事に着手、そして明和六年（一七六九年）に完成したのが現存する轟水道である。この改修工事には、従来の陶管の代わりに藩内の網津産の馬門石（赤石）を使うことにし、この石を約三十センチ角、長さ一メートルの長方型につくって、これに凹形の溝を彫ったものを連結し、蓋石をかぶせて樋管としている。

東京の玉川上水道は、今では地下鉄工事で朽ち果てた木樋の破片だけが掘り出される状態だが、相前後してできた轟水道が今なお昔のままの姿で、今日に至っていることは貴重な史蹟であると共に、住民は限りない感謝の念を抱いている。

良質の水がつきることなく湧き出し、鏡のような水面に映し出される木影は、たとえようのない美しさをかもし出している。また夏は涼を求める市民で賑わう。

―宇土市―